国立国語研究所報告8「談話語の実態」

——希望を中心として——

宮地敦子

録音器の普及によって、話言葉を研究の資料として定着させることが可能になった。しかし実際問題として、録音作業は案外らくな仕事ではない。さらに録音テープを文字化するに要する時間と労力は一般の想像以上のものがある。メロディーやリズムの視覚的定着化は一層困難である。国語研究所がこれらのなみなみならぬ困難を克服して、大量の談話語を忠実に文字化し、定本を作成されたこと自体、国語学史上特筆さるべきことである。さらにその資料に対して詳細な量的調査を行はれたこと、それがどんなに容易でない仕事であるかは、本書にざっと目を通すだけでも分ることである。しかもこれが僅か二年の間に、主として十人に満たぬ方々の手によって出来上ったことは驚異に値する。当事者の御努力及びその成果に対して、第一に敬意を払はねばならない。

まづ数字を見ただけで頭の痛くなる人種にとって、巻頭の明解な「概要」は、本書を読まうとする意欲を維持させる点で有益である。それによれば、本調査は一九五二年に着手、テープ式録音器によって、日常談話を約八〇巻採集し、その中分析に堪へる明瞭度に録音されたもの六〇巻を、さらに明瞭度を異にしその他の諸条件のほゞ同質を予想されるA・B両資料群に分ち、A資料及び比較資料（ニュース・ニュース解説・座談会等）によって分析を行ひ、その報告として一九五五年三月刊行された。資料そのものの刊行——例へば「言語生活」（録音器欄）、「ことばの現代風景」などにもすでにその姿が窺はれるが——も今後待たれるものの一つである。さてその内容は音節、語、文節、文を単位とする構造上の諸問題に着目しつつ、直接には(1)イントネーション (2)語、文節、文の長さ (3)文の構造 (4)語の種類、使用度数、用法などの問題をさぐることを中心とされた。各項目はそれぞれ宇野義方、中村通夫、飯豊毅一、大石初太郎四氏の執筆になる。

巻末の「調査への反省」は、分析者の今後の研究に対するもくろみが窺へて大いに参考になるばかりでなく、読者の文句封じも兼ねてゐるのではないかと誤解もしたくなるほどにゆきとどいてをり、いまさら注文をつけ加へることは蛇足の感があるが、以下各項の紹介をかねて書きしるしたい。

(1)イントネーション　テープ比較資料　一〇巻　五巻

話言葉に必然的に伴ふ音的要素——メロディーやリズム——は、話手の態度を示し、対人関係の構成にあづかること、いはゆる辞の機能に匹敵すると思ふが、その捕捉が困難なために具体的な報告はまだ殆どない。本書ではまづ第一に話言葉のメロディーの中のイントネーションの問題をとりあげ、今後のこの方面の研究の先鞭をつけられたことは何よりよろこばしい。その調査は「文中の切れ目に注意しつつ、特に文の終りに重点を置いて」行はれ、イントネー

ションの種類、型などに注意すべき結果を出された。特に「文末文節、文末助詞のイントネーション」は、話言葉の文法と関係の深いものとして興味がつきない。さらに有意義といふ点で見逃がしてならないことは否定的な結果の報告である。――たとへば「量的に多く調べる場合には文中の切れ目を省略して文の終りだけを扱っても大差は無さそうである」「性、年令教養等の条件は、イントネーションにあまり決定的な影響を与えないのではないか」など本書を通じて随所に見られる――。いふまでもなく調べたが結果が出なかったといふことは出たといふことと同じに大切である。しかも個人の研究者はその否定的報告によって無駄をくりかへさないですむといふ便宜を与へられる。なほこの項についての希望を述べると、「調査への反省」にすでに言はれるとほり、さらに文全体のイントネーションについても是非触れていただきたいが、その場合にイントネーションを1234四段階であらはす方法で押していけるものかどうか、分析者の予想を併せて聞かせてほしかった。なほ私個人の感じをつけ加へると、音の低いものは値が小さく、高いものは大きい。即ち本書と逆の値の取り方であればもっと分りやすいであらうと思った。

談話語の研究はその術語あるいは符号についても未定の状態である。本書などは今後その基準となる有力候補と考へられる。正確といふほかに理解しやすい見やすい術語や符号を選ぶといふ点でも一層の工夫をお願ひしたい。見やすいといふ点――これは読者の興味をつなぐことと深い関係がある――から、なまの数表でなく、グラフなど直接目に訴へる方法でも差支へない場合は、なるべく後者を選んでほしい――例へば(3)文の構造の項のスペクタクルグラフはさういふ点でありがたい――。

(2)文、文節、語の長さ　テープ比較資料　一八巻一七巻

文の長さを文節・語・音節を尺度として、次に文節の長さを、語・音節を尺度として、さらに語の長さを音節を尺度として調査し、それぞれの結果を比較資料との差をとほして談話語の長さの特徴とされた。特に文節を尺度とした一文の長さの平均値、四文節弱は、同研究所がさきに発表した「白河に於ける二四時間調査」(研究所報告Ⅱ)の結果とほぼ一致してゐる。特定の人を対象とする長時間にわたる調査、多くの人を対象とする比較的短時間の調査、といふ二つの異なった条件による調査の値がほぼ一致したことは、談話語の文の長さは非常に短い、しかもその平均値は三～四文節の間にをさまるといふ結果を一往たしかなものとして受取ることができる。なほ談話語の各資料相互の条件差による長さの差異は、「談話語の持つ幅の中での小異であって、いずれの場合にもニュース・ニュース解説などの持つ幅と合致することはない」ことも報告されてゐる。この項は内容形式ともに非常に明晰であり、談話語の長さに関する権威ある報告として今後その基準となるものであらう。ただ気にかかることは二五頁にわたる詳細な報告の中に例文が一つもないことである。何を一文と認めるか、かりに「中等文法」的なものに基準を求めてもその基準から溢れるものの多いこと自体が談話語の特徴の一つであると考へる。いったい文の認定は録音テープを聞いて行はれたのか、定本を読んで判断されたのか。また言ひさしや倒置の始末はどうされたのか。それと重なるが話末はすべて文末と認められたのか。或は不分明なものは調査対象からはづして「中等文法」的尺度の適用できる範囲のみを対象とせられたのか、すべてが明らかでない。

一般に、具体的な例示や説明のない数表

の連続は、読者を要らざる不安に陥れる。結果の報告だけでなく、分析者の考への過程を示していただきたい――「調査への反省」に「長さを計る尺度としての各単位の得失について検討を加えつつあったが、報告するに十分な結果に到達しなかったことを付記」(179ページ)するだけでなく、検討はどのやうにされ、又どういふ点で報告するに十分な結果に到達しないのか、その試行錯誤的な苦心の過程の発表も私達に大いに役立つものである。個人研究者は集団的研究に「結果」のみを求めてゐるのではないと思ふ――。項目によって差はあるが、本書を通読して強く感じたことの一つである。

(3)文の構造　テープ比較資料　一〇巻三巻

談話語の文の構造を、文の成分に重点を置いて、その組合せ、比率、構造といふ観点から調査された。それによると談話語では各成分が述語に対して一次の文が大部分を占め、成分の組合せは少数の型が頻用されてゐること。各成分の比率は、ニュース、新聞などに比べると連体修飾語の割合が少なく、独立語の割合が多いこと。各成分の構造についてみても、主語、述語、連体修飾語、連用修飾語、独立語それぞれに談話語の特徴が見られることを種々の面から指摘し、特に述・用の成分――上に対して述語、下に対して連用修飾語のもの――は、文の構造上注意すべきものとされてゐる。全項たいへんな労作であり、文論確立のための有力な材料となるであらう――たゞの文長さの問題と結びつかなかったのは残念であるが――。なほ注目すべきは「調査方法」で、ローマ字、アラビヤ数字等の符号を使って、文の成分を下位分類されたことである。分析者の意欲的な試みに敬意を表する。細部の疑問は、独立してくはしく発表された時にゆづるが、一般に「コトバ」を符号に置きかへることは、言語の体系化の上にどのやうな位置を占めるのか、その見通しについても触れてほしかった。これは(1)イントネーションの型の数表化の場合も同様である。疑問や希望をつけ加へると、独立語を接続、対等、感動、間投、応答、呼びかけ、提示に分類し、その使用度数を調査されたが、この分類基準には次元の異なるものが混在してゐないだらうか。それぞれの例が全然挙がってゐないので批判の余地がない。初出の述語には定義と二三の例がほしい。――とくに対等、提示の意味が分りにくい――。次に調査対象について。本書をまとめられた「話言葉の研究」(「言語生活」四三号)によれば、文の構造の調査の際、「言ひさしや文末不分明また文脈が途中で変るなどのためコード不能やコード困難のもの」はその調査対象から取り除いたとある。これは本書の本文でも明瞭に断り書きがほしかった。さらにその具体例及び全調査対象中に占める割合等を示していただけると一層有益であらう。これは(4)項の接続詞の第二分析のD(188ページ)、さらに本書を通じて「その他」で一括されてゐるものについても同様である。

(4)語の種類、使用度数、用法　テープ比較資料　二〇巻七巻

最後は題目の示すとほり語に関する調査である。まづ第一段の仕事として品詞の使用率を調べ、書言葉や、ニュース・ニュース解説等のそれと対比して談話語の特性を明らかにする手がかりとされた。それによると談話語では名詞が少く、副詞、感動詞が多いこと、また少し見方を変へると、コソアド語、融合形が多いことなどが指摘される。次いでこの第一段の作業の結果、課題として浮かびあがってきたいくつかの問題の中、融合形、副詞、接続詞、形容詞、形容動詞をとりあげ、主としてそれらの語の種類、使用度数乃至用法について分析をほどこされた。融合形、形容(動)詞については、結果報告をそのまま利用できさうであ

り、副詞、接続詞については、その処理方法したがって結果には疑問も起ったが、読者も共に考へることができてむしろ一層有効である。この(4)項は具体的な例示や註記が本書中最も多く、それだけに疑問も具体的な事が次々に起ってたのしかったが、そのすべてを書きしるす余裕は勿論ない。がその第一は、「調査への反省」の項にすでに述べてあるやうに品詞の認定の問題である。たとへば副詞の語種の表を見ると副詞と認めてよいかどうか判断に苦しむものが多い。特に使用度数に於て第一の「そう」ほか上位のもの――十位までで総数の半分以上を占める――には応答語及び所謂あそびことばが相当含まれてゐるやうであり、これらを副詞と認めるか否かによって副詞の総数に影響を及ぼし、その結果はたして「日常談話では、新聞・小説等の書きことばやニュース・ニュース解説のことばに比べて、副詞の使用率が著しく高い」（148ぺ）「少数の副詞の使用度数が特に高い」（153ぺ）かどうか改めて検討を要する。なほ小さいことであるが、「あゝ」「いわゆる」などを副詞（149 150ぺ）、「から」「たら」を接続詞（155 156ぺ）に入れられた理由は何であらうか。説明がほしい。品詞の使用率の報告は、品詞の認定の仕方によって大事なところが動くかもしれない。さらに遡って、書言葉をもとにした品詞分類そのものが話言葉を扱ふ場合にどれほど価値があるものかどうか、改めて考へさせられる問題である。

以上本書に対する望蜀をまとめると、(イ)「分析用定本」を公開し読者はそれを参照しながら本書を読むといふ形式が望ましい (ロ)直接今回の調査対象とはならなかったもののへの配慮紹介がほしい (ハ)「結果報告」とともに「調査過程」や「試案」もくはしく示していただきたい (ニ)各項の立体的な絡み合ひがほしい (ホ)見やすいといふ点でも一層考慮していただきたいことなどである。なほ本筋からはづれるが、(ヘ)製本を入念にしてほしいことをつけ加へる。

共同研究は個々の力の総和よりも相乗の力を発揮することが多い。本書はそのよい例である。利用の程度、方法に差こそあれ、話言葉に興味をもつ人々にとって必携の書であると思ふ。このやうな量的調査が今後ますますさかんになることがのぞまれるが、一方では個人の仕事もいよいよ必要である。また量的調査ではかげに隠れやすい少数例の存在も見逃されてはならない。そこのかねあひはオートメイション化時代の今日の大切な課題の一つであると思はれる。しかも一往客観的な形をとった量的調査でさへも、その数のもととなる基準の認定は当事者の主観によってゐる。そこから出発した数表は極端にいへばその数表製作者自身しか使用できない。本書の結果も分析者によって相当に動く場合もあり得ることを考慮に入れて利用する必要がある。

当事者には周囲の者の思ひ及ばぬ苦心がある。内部の事情を全然知らないために筋違ひな希望があるかもしれない。一読者の感想として聞かれた上、今回のやうなすぐれた調査を何年か毎にくりかへされることを願ふ。なほ本書の執筆者さらに本書の利用者によって、談話語の体系についての論の出ることを、学界の発展のためにも、また当事者の御努力に報いるためにも切に念じてやまない。（東京都中央区銀座 秀英出版 昭和三十年三月発行 A5 一九五頁 二〇〇円）

―京都大学大学院学生―